聖蹟桜ヶ丘“People”ガイド

セイセキ ZINE

聖蹟人

#11



theme

灯す人

ちいさな明かりがいくつも輝く
聖蹟桜ヶ丘には
人の思いを灯す冬がある。

Take Free

BALL. × 京王電鉄

We love SEISEKI



SEISEKI PEOPLE 1

まちに明かりを灯し続ける。

オーセンティックバーが教える お酒と会話の流儀

聖蹟桜ヶ丘の駅から歩いて5分程度。「アンノーン」の店名看板が穏やかに光る。1999年の開店からひっそりと、でも確かにまちの人たちの心をあたたかく灯しているバーの店主に、話を聞いた。

Interview : Yukio Taira、Sayaka Hasegawa

川島 恭子さん

多摩市に移住して50年ほど。子育てのかたわらスクールに通い、バーテンダーに。聖蹟桜ヶ丘にアンノーンを開店し、28年目を迎える。息子もバーテンダーとなり、弟弟子の店で働く。



「たそがれ時」を意味する“トワイライト・ゾーン”

毛利隆雄氏のオリジナルカクテル。ホワイトラムやアプリコットブランデーを使用。

お客さんの心を灯し続ける場所でありたい

一枚板のバーカウンターは、広々として重厚感がある。キラキラと輝くバックバーには、300本以上の酒瓶が並んでいる。バーと聞くと通常の飲食店と違い、独自のマナーがあるのではないかと、店に入る前は緊張感があった。けれど、「バーだからって特別なことは何もないんですよ。他の飲食店と一緒です」と、店主の川島恭子さんが明るく話してくれた。確かに他のお客さんへの接客を見ていると、楽しそうに会話をしている。静かにお酒を嗜む場所という印象は覆った。くだけた様子で川島さんとお客さんは軽やかに談笑している。「バーも喫茶店も過ごし方は同じ。店内で騒いだり、電話をかけたりするのはマナー違反ですよね。他のお客さまの迷惑にならないようにマナーを守りながら会話を楽しんでもらえたら」









開業時に作ったオリジナルマッチや、川島さんがコレクションしたお酒のミニボトルが陳列されていたり、趣がある。師匠の代名詞であるマティーニは、できたての冷えた状態で飲むのが一番。



Scene.01　使うお酒は目の前に。

カウンターの上には使うお酒を並べる。お客さんと話しながら、その方が今求めているものを探り、自身の引き出しから作り出していく。



Scene.02　映える！シェイカーシーン

手首のスナップをしっかり使ってシェイクしないと、氷が粉々になってしまうのだそう。厳しい修業を経て得た、職人の技。

川島さんがバーテンダーを志したのは、出産後、育児をしながら仕事を再開したいと考え、サントリーフードビジネススクール（現在は閉校）に通い始めたことに端を発している。

「最初はカフェをやりたいなと思っていたんですけど、そこでバーテンダースクールが併設されていたんです。バーテンダーのレジェンドの方々が講師で、のちに師匠となる毛利隆雄さんとも出会いました」そののち、毛利さんが経営している毛利バーを訪れ、マティーニの巨匠とも呼ばれている毛利氏の１杯をいただいたときに、このマティーニを作れるようなバーテンダーになろうと心に決めた。「バーテンダースクールでは試験もあるんですよ。お酒や一般常識なども。当時、中学生の息子もスポーツや勉強をがんばっていたから、100点を取らなきゃと取り組みました」。毛利バーでの研修中は、掃除、果物の絞り方、氷の割り方など丁寧に指導され、その技術を身につけた。

アンノーンという店名は、“未知のもの”という意味を持たせている。開業当時、聖蹟桜ヶ丘にはあまり知り合いがおらず、初めて来店するゲストから見ても、自分が“未知のもの”だと考えたからだった。今は常連客も多く、店はにぎわいを見せている。初めてバーに行く人へのアドバイスを聞くと、「私たちバーテンダーはカクテルを作り出す職人であり、お酒のプロフェッショナルです。ノンアルコールでも何でも分からないことがあれば、どんどん話しかけて聞いてほしいです」と微笑む。川島さんによると、カクテルをより楽しむポイントは２つ。カクテルグラスは薄いガラスで作られているため壊れやすいので、安全のためにも乾杯は控えたほうがいいということ。そして絶妙な温度調整で作っているので、提供されたら冷たいうちに飲んでほしいということだ。そんな川島さんが今回の撮影のために作ってくれたのが、トワイライト・ゾーンというオリジナルカクテルだ。「師匠が作ったこのカクテルは、たそがれ時や夜明け前の薄明かりを表現しています。グラスの底には、チェリーが沈み、ほのかな明かりのようですよね」。

このカクテルのように、川島さんが大事にしているのは、アンノーンが人を灯し続ける場所であること。「物理的な明かりという意味もありますが、バーのような居心地のいい空間も明かりになると考えています。楽しいことがあった時だけではなく、辛いことがあった時や悲しいことがあった時でもお店に来てもらって、癒やされてほしい。心に明かりが灯るような時間を過ごしてもらいたいなと」。それが開店当初からの願いだと語る。川島さんは今日もおいしいお酒を提供し、まちの人たちをあたたかく灯し続けている。



Unknown（アンノーン）

多摩市関戸 4-7-8 F.T.プラザ１階
18:00～24:00（LO 23:00）　営：月、金、土
042-375-5543



SEISEKI PEOPLE 2

佐藤 礼恵（ゆきえ）さん

多摩市在住。絵描き、ライター。街ブラやグルメ取材を長く手がけ、2012 年に「たまにわ」を創刊。「編集長が行く!」「レアメニューフェア」など名物企画が数多くあり、読者を楽しませている。



まちの人たちとの交流から生まれた季刊誌

「たまにわ」編集長が語るセイセキの魅力

取材、編集、配達までひとりで行う「たまにわ」編集長・佐藤礼恵さん。多摩エリアの個人店を紹介して 14 年。冊子がつないだまちの話を聞いた。

Interview、Text：Akira Andoh/ Interview：Fumie Soma、Momoka Tanaka/ Photo：Yufumi Omori

応援するつもりが自分が支えられていた

「個人経営のお店を応援する、と言いながら、本当はみんなが『たまにわ』を支えてくれているんです」

多摩エリアの個人店を紹介するフリーマガジン「たまにわ」。編集長の佐藤礼恵さんは、取材から執筆、イラスト、デザイン、配達までをひとりで手がける。始まりは 14 年前。個人店の店主たちに「冊子を作って」と頼まれ、1 冊きりのつもりで引き受けた。ところが出来上がると「続けてよ」の声から、季刊誌として走り出すこととなった。

人見知りで、広告の営業は苦手。それでも皆さんの紹介を通じて誌面には広告が並ぶ。自分の店が載っていないのに置いてくれる店もある。ある店のトイレにはバックナンバーが並び、自分の店が表紙になった号にだけ「持ち帰らないでください」と貼り紙があるという。

店舗でたまに会うお客さんでさえ、佐藤さんのことを「たまにわちゃん」と呼ぶ。それほどまちの中になじんでいる。印刷コストを抑えるためにモノクロにしようか、紙を安くしようかと漏らせば、店主たちに「そんなの『たまにわ』じゃないよ」と止められる。いつの間にか、「たまにわ」は佐藤さんひとりのものではなく、みんなのものになっていた。懇意にしていた店の大将は、亡くなる前に「『たまにわ』をよろしくな」と言い残した。「だから、続けられるんです」と佐藤さんは微笑む。

聖蹟桜ヶ丘に限らず、多摩の個人店は横のつながりが強く、足の引っ張り合いがない。コロナ禍の時は同志のように支え合い、新しい店ができれば仲間に迎え入れる。佐藤さんはそんな様子を「あったかいまち」と呼ぶ。

「情報っていうとウェブにもあるけど、紙の冊子になることで、実際に手渡すことができる。人と人が出会う場に、『たまにわ』があるとうれしいなって思います」



たまにわ

年 4 回発行のフリーマガジン。多摩エリアでがんばる個人店やまちの人たちの魅力を紹介。編集長自ら考案した読み物企画も。

創刊前、店主たちと打ち合わせをした時の一枚。みな真剣な眼差しで意見を言い合っていた。創刊から14年、休むことなく発行を続けている。

佐藤さんおすすめの セイセキSPOT

● キルトチェリー手芸教室

毎週通う習い事じゃなくて、「これだけ作りたい」時に頼れるのもいいんです。幼稚園に持っていく手提げバッグから、おばあちゃんの着物の袖直しまで。

● アーユルヴェーダサロン Sapta

アーユルヴェーダのサロンは、多摩では珍しいと思います。聖蹟桜ヶ丘に長く住む店主さんが、原因の分からない不調に悩んだ経験から開きました。同じ悩みの方にぜひ。

● 小形衣里フラメンコ教室

20年以上続くフラメンコ教室です。発表会では、幅広い年代の女性たちが生き生きと踊る姿に元気をもらえます。いつも笑顔でパワフルな衣里先生も、ずっと素敵。

「多摩を、面白がる。」その思いで作り上げた

セイセキ発のクラフトコーラってどんな味？

多摩市産のブルーベリーで仕込んだシロップを、炭酸で割ってごくり。スパイスはほどよく、飲みやすい。クラフトコーラの作り手が、「多摩」を面白がるわけとは？

Interview、Text：Akira Andoh/ Photo：KAEDEsign

うえむら あつと
上村 淳斗さん

多摩ニュータウン育ち。IT企業の営業職を経て、クラフトコーラ「tamani cola」を立ち上げる。立川のチャレンジショップ「靄渦」でも働く。

作り手に回ったら、「多摩」がずっと面白くなった

「まずは自分が、多摩を面白がりたかったんです。作り手の側に回れば、それができるんじゃないかと思って」

そう話すのは、クラフトコーラブランド「tamani cola」を立ち上げた上村淳斗さん。多摩ニュータウンで育ち、聖蹟桜ヶ丘は祖父母と食事したり、花火大会に通ったりした勝手知ったるまちだ。ブランド名には「多摩に」あることと、ふとしたときに「たまに」思い出してもらえる存在でありたいという思いを重ねた。

20代は都心で暮らし、IT企業で約6年、営業をしてきた。形のないものを売るうちに、手で触れられるものを作りたくなった。世界一周の船旅を経て、下船するとすぐにコーラづくりに着手。題材は、自分のルーツがある「多摩」と決めていた。

製品第1号は、地元の知り合いの農家さんのブルーベリーを使った、クラフトコーラ。レシピから一緒に考えてくれる製造先を探し、企画書を手に営業を重ねた。製造元の工場と試行錯誤の末、2026年8月に販売開始。

「多摩って、住んでいたのに知らないことばかりでした。農家さんと直接話すと、こんなものを作っていたのかと驚くし、製品を置いてくださるお店とも、お客さんとしてでは聞けない話ができる。消費ではなく、生産の側に回ってみたら、多摩はずっと面白かったんです」

プロダクトにコーラを選んだのは、老若男女を問わない飲み物で、気軽で身近なものだから。現在は、多摩市のどんぐりを使った新作の開発も進めている。

「多摩で面白いことをやってる人がいるな、と広がって、それをきっかけに多摩を知ってもらえたり、面白い人が増えたりしたらうれしいですね」

tamani cola

@tamani.cola
【商品】クラフトコーラシロップ（ブルーベリー）290g　3,000円（税込）
【商品取扱店】
「シナモン」（聖蹟桜ヶ丘）
@cafeterracecinnamon
「靄渦」（立川）※店内カフェでイートイン可能
@moyauzu_tachikawa
※最新の取扱店情報は公式Instagram（@tamani.cola）をご確認ください。



炭酸水で割るのが定番だが、今の季節はお湯割りもおいしい。また、お酒と割ったり、アイスやヨーグルトにかけるのもおすすめなのだとか。ロゴのモチーフはタヌキ。幾何学的に“化けて”いるのは、「これから変化していくブランドであってほしい」から。デザインは、5年前に一人旅のゲストハウスで出会った友人が手がけた。







まち・ひと・駅がつながる場所

タトネの人 Vol.2

Interview、Text：Utaha Nishihama/
Photo：Yufumi Omori

貸棚・シェアキッチン・レンタルスペース・カフェから成る複合交流拠点「タトネ」。ここを起点にセイセキで自身の活動を広げる“人”をピックアップ！



Profile 岐阜県出身。多摩市居住歴は 8 年。実家が建材屋を営んでいることから、昔から起業に興味を持つ。2025 年夏に「moonside」のネットショップをオープン。全国の雑貨ショップなどでも販売中。

来訪者には、棚もカフェも周遊してこの場所を満喫してほしい

棚主＃2 **伊藤 雅斗さん**（ブランドディレクター）

お香ブランド「moonside」を展開する棚主の伊藤雅斗さんは、普段は広告・デザイン会社でプロデューサーとして働いている。会社に勤めながらも起業への思いが強く、コロナ禍のおうち時間を経て、もとから好きだったお香により関心を抱くように。その後、製法を勉強し、昨年ブランドをスタート。「『moonside』は夢がテーマ。お香を焚いて寝るとその香りにまつわる夢を見ることができるかも？ という遊び心ある商品です。コンセプト、香り、パッケージまで自分でディレクションしています」。多摩市発の新進ブランドの“これから”に要注目だ。





伊藤さんの棚では、全種を販売。特に人気なのは“SKY DANCER”（空を飛ぶ夢の香り）で、さわやかで澄んだ香りが特徴だ。随時新商品も開発している。

詳細はこちら▶

酒場の灯りに誘われて

駅近ではしご酒！ 聖蹟人はどこで飲む？

presented by 市民クリエイター

居酒屋やバーが多く集まる聖蹟桜ヶ丘駅東口方面で、市民クリエイターがはしご酒！お腹も心も満足する、どこかほっとする3軒を紹介します。Text、Photo：Tamaki Onda

恩田 環さん
多摩市在住歴5年。セイセキZINE #2から市民クリエイターとして取材に参加。



「FRANKY」

FRANKYレモンサワー（立ち飲み）¥385
うずらのウフマヨ（お通し）¥300

さわやかな香りの自家製無糖レモンサワーで乾杯。ほか、生ビールやワインなど立ち飲みメニューのお酒なら385円に！季節によって替わるお洒落なおつまみメニューにも注目です。

多摩市関戸 2-41-1
京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター 東高架下
ランチ 11:30～15:00（LO 14:30）、ディナー 17:00～23:00
（料理 LO 22:00、ドリンク LO 22:30）無休
042-319-3460 @franky_seiseki

「呑み食い歌処 一平」

生ビール ¥600・
おつまみ（お通し）¥500・冷奴 ¥400

豊富なメニューとカラオケでにぎやかに楽しめる居酒屋。店主や女将さんとのおしゃべりも弾みます。常連さんにおすすめを聞くと、ピザとまぐろぶつとのこと。



多摩市関戸 2-39-9
18:00 ～ 23:00
（フードのみ LO 21:50）
休：日・祝
042-372-9548
@1.ppei2020



「ソ・バーカロ」

泡盛ソーダ割り
¥600・蕎麦 ¥650

はしご酒のシメにうれしい、お蕎麦がいただけるバーでほっと一息。沖縄料理店があった名残で沖縄メニューも充実！ 泡盛「久米仙」のソーダ割りをいただきました。



多摩市関戸 2-39-15 桜ビル103
ランチ 11:30～13:00、
ディナー 17:00～24:00（LO 23：30）
（土・日・祝）15:00～24:00（LO 23:30）無休
042-337-0171 @so.bacaro

本日のお会計 ¥3,435！

※価格はすべて税込になります。

SEISEKI PEOPLE 4

利用者に寄り添い、心にあかりを灯す

若手ホーム長が大切にしている信念とは？

20代で住宅型老人ホームのホーム長となった吉田拓人さん。「介護職は、世の中になくてはならない価値ある仕事」と熱心に語る吉田さんの素顔に迫った。

Interview：Mizuho Iwasaki、Fumie Soma



吉田 拓人さん

大学では福祉系の学部で学び、ベネッセスタイルケアに新卒で入社。調布の老人ホームで経験を積み、副ホーム長に。昨年ボンセジュール聖蹟桜ヶ丘にホーム長として赴任。入居者やスタッフからも厚い信頼を得ている。









音楽を流して雰囲気づくり

［**写真上・中左**］3階のダイニングルームは、食事やイベントの準備に使う、みんなの憩いの場。［**中右**］1階ラウンジにはホーム長のアイデアでレコードを設置。音楽が流れると自然と心もなごむ。［**下**］窓からの日射しが気持ち良い2人部屋。



幼い頃からなじみのあった介護の世界へ

「今の仕事は天職だと思っています」とまっすぐな眼差しで語るのが印象的な、吉田拓人さん。介護の仕事に興味を持ったのは、幼少の頃。おばあちゃん子だったという吉田さんは、祖母の家によく遊びに行き曽祖母の高齢者施設にも足を運んでいた。その施設のスタッフがとても明るく、楽しそうに働いている姿が幼いながら心に残ったのだそう。その思いが途絶えることなく、ベネッセスタイルケアに入社する。

「この会社を選んだのは、『その方らしさに、深く寄りそう。』という事業メッセージに共感したから。実際、現場に入っても、現実とのギャップに悩むことなく、すんなりと仕事に打ち込めました」

昨年の6月からホーム長として現施設で働くことになった吉田さんは、自身の強みは現場を知っているところだと話す。

「7年間現場で経験を積んできたので、スタッフが困っていることがあったら、アドバイスすることができます。ご入居者さまに合わせて対応を変えていくことは大切なこと。それが大変でもあり、楽しさでもあるんですよね」。一方で、管理職になったばかりの頃は、営業など施設外の仕事に注力することも多くなりがちだった。少しずつホーム内のことをより丁寧に見ていくようになったことで、スタッフから「施設の雰囲気が良くなった」と言われるように。今ではスタッフや入居者の方からの信頼は絶大だ。

入居者の方が笑顔になる瞬間やその家族に感謝された時、さらに、スタッフの成長を感じられる時が、吉田さんのやりがいにつながっている。人材不足が騒がれる介護業界だが、人の生活を支える大事な仕事だと語る。「課題はたくさんあるけれど、目の前の入居者さまを大切に思う気持ちやスタッフ同士が支え合う姿を、ホーム長として守り続けたいです」。吉田さんの深い情熱は、社会の中であたたかな明かりとなっている。



住宅型有料老人ホーム
ボンセジュール聖蹟桜ヶ丘
（運営：ベネッセスタイルケア）

多摩市東寺方1-20-5
0120-171-165
※電話受付時間　9:00～18:00
（土・日・祝日を含む毎日）

SEISEKI PEOPLE 5

100種以上の生薬からオーダーメイドで調合!

ご自愛シーズンに知りたい、健やかに生きるための知恵

ずらりと陳列された多種多様な生薬から、その人に合うものを選んで調合していく。その様子はまるで魔法のよう。漢方薬ってどんなもの？ そんな初心者の疑問を薬剤師・長峯友恵さんが解説してくれた。



Interview：Nobuko Matsutake/ Interview、Text：Madoka Oboshi/ Photo：Yufumi Omori

不調を抱えるお客さまをあたたかく見守る

店内に足を踏み入れると、鼻の中にスッと入ってくる漢方薬の香り。呼吸をするだけで健やかな気分になれる、そんな空間だ。奥の調剤室でテキパキと調合するのは、薬剤師の長峯友恵さん。長峯さんが夫の輝明さんとともにこだま堂漢方薬局を開業したのは、2010年のこと。その後、2016年には2号店の府中店を開業。聖蹟桜ヶ丘店では漢方カフェを併設していた時期もあったがクローズし、2020年に現在の場所に移転

長峯 友恵さん

埼玉県出身。薬剤師。同じく薬剤師の夫とともに、漢方薬局を営む。自身の健康管理は、血流の良くなる漢方薬や栄養補給のサプリを飲む、薬草を使った料理を作ること。



した。
「子どもの頃から薬草に興味があって、雑草の中から薬草を探して、すりおろしたりしていたんですよ」と、幼少期の思い出を懐かしそうに話す長峯さんだが、理論的に学び始めたのは、実は漢方薬局に勤め始めてから。
「薬学部を卒業後、ドラッグストアに就職しました。働く中で薬剤師としてより人の役に立つような仕事をしたいと考え、漢方を専門的に学びたいと思ったんです」
日本には“日本漢方”(和漢)と“中国漢方”(中医学)の大きく2種類の漢方の系統があり、長峯さんは中医学の資格を取得。こだま堂漢方薬局では、その中医学に基づき処方や調合を行う。処方する上で大事にしているのは、カウンセリングだ。
「初回は大体1時間ぐらいお話しますが、長いと5時間くらい話した方もいらっしゃいます。病の原因は病気になる前にあるものなので、いつから調子が悪いのか、体調を崩す前にはどんな生活をしていたのか、きっかけとなる出来事はなかったかを重点的に聞くようにしています」
カウンセリングを通してその人の体調や体質を分析し、よりその人に合った漢方薬を考える。そう語る長峯さんの言葉には迷いがなく、とても頼もしい。話を聞いているうちに、「あれも、これも」と訊いてみたくなる。そんな長峯さんだからこそ、悩みを聞いてもらうだけでも楽になったという人も多いのかもしれない。医師とは違ったアプローチで、オーダーメイドで悩みや不調に向き合う。それが、漢方薬局の強みだ。さらに、長峯さんが思う漢方の魅力を聞いてみた。
「自分で自分の不調を治せるところですね。もちろん、自分では治せない病気もあるので、それは医師に任せるべきです。ただ、自分の責任でちゃんと治せるものもあるから、それは自分で考えて治せるようになればいいなと。薬剤師である私は、そんな皆さんのセルフケアのお手伝いができればと思っています」。漢方をきっかけに、ライフスタイルを見直し、食事や生活に気を遣うようになってほしいと、長峯さんは願う。
「お客さんから、『これを食べると具合が悪くなることが分かったんです』など、今まで気付かなかったことに気付きを与えられるとすごくうれしいです」
漢方をより広げていくために、これから挑戦してみたいこともあるそうだ。
「YouTubeやVoicy、メルマガ配信などいずれはやってみたいです。あとは将来的に、老後の趣味として漢方カフェを再開したいかな」
そう語る長峯さんの目はキラキラと輝いていた。この先も、このまちで心身に悩む人たちをそっと照らす、灯火のような存在であり続けるのだろう。

【漢方薬のできるまで】

道具と材料

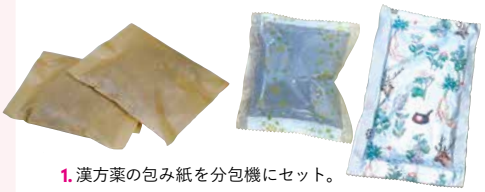


動悸や神経のたかぶりを抑える、苓桂甘棗湯(りょうけいかんそうとう)という漢方薬を調合。生薬は「茯苓(ぶくりょう)、桂皮、大棗、甘草」を使用。奥にあるのは一包ずつ包む、手動式の生薬分包機。









1. 漢方薬の包み紙を分包機にセット。1度で15包分（約2週間分）を作ることができる。**2.** 生薬の瓶から、スプーンで必要な分量を取り分ける。**3.** 分包機に4種の生薬を入れ、まんべんなく混ぜてならす。一包ずつ包み紙に分け入れて完成。



長峯さんご推薦！

【体調管理におすすめの生薬】

なつめ

昔から毎日3粒食べると老いることがないと言われている。血(けつ)を増やし、気持ちを落ち着かせる働きも。現在は食品としてスーパーでも手に入る。

クコの実

目に栄養を与えるといわれている。「ゼアキサンチン」や「ルテイン」などの目に良い成分が豊富に含まれているので、疲れ目などの悩みに。

百合根

生薬としての名前は「百合(びゃくごう)」。肺を潤す働きがあるので、咳で悩んでいる人に。虚弱体質で栄養をつけたい人にも、おすすめ。

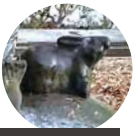
こだま堂漢方薬局 聖蹟桜ヶ丘店

多摩市一ノ宮3-2-20
10:00~19:00、土・日 10:00～16:30
休：火・祝日 ※臨時休業あり
042-319-6383
https://kampo-kodamado.jp/

あれ気になる??
歩いて見つけた

セイセキの珍光景

Text、Photo：Utaha Nishihama



秋の夜長にひつじを数える・・・

和田の倉沢川緑地の中にあるこちらのひつじの彫刻。その名も「草をはむ（羊）」。毛並みが上手く表現され、思わず触りたくなるような作品だ。もとはというと、和田エリアの区画整理にあわせてできたもので、緑道内に作られた。かつては「さわれる彫刻」として子どもたちが触ったりして楽しんでいた。手がけたのは彫刻家の渡辺尋志氏。他にも関戸や連光寺など多摩市各地の町名由来板を手がけている。筆者が小さい頃から見ていた連光寺のうさぎの彫刻もそのひとつ。公園の中に可愛らしく飛び出すようなうさぎたちが町名由来板だったとはつゆ知らず、改めてじっくり見てみたくなった。渡辺氏の彫刻作品は龍やうさぎなどモチーフはさまざまだが、どの作品もリアルに作り込まれていて見応え十分。秋の散策の折に、市内に点在する動物たちに会いに行ってみては。





［写真左］緑道にひっそりと佇むひつじの石像。地域の子どもたちにも親しまれていた。［下］こちらは、九頭龍公園の大通り側の入口からすぐのところにある。大きな龍と、如意珠をテーマにしたモニュメント。渡辺尋志氏により1992年に作られた。［右上］大谷戸公園入口近くにある、うさぎ。この地域で兎狩りが行われ、うさぎが多く生息していたと思われることから制作された。

『草をはむ（羊）』渡辺尋志氏制作、岸川久美子氏撮影
パルテノン多摩提供

セイセキ歴史Walk #10

Text：Satomi Yoshioka

多摩地域に息づく学びのともし火

地域社会や近代化の基盤に影響を与えた「和算」

和算とは、中国から伝わった数学を基に、図形や円理※1を巧みに解くことに長けた日本独特の数学です。行列式※2を発見、円周率を高い精度で計算するなど、当時、世界的にも高度な理論を生み出した関孝和〈1642（寛永19）年頃～1708（宝永5）年〉をはじめ、江戸時代には数多くの数学者、和算家らが登場。身分や年齢性別に関わらず、彼らに師事する者も増え、「関流」といった数学の流派が生まれました。

多摩地域にも、和算を学ぶ者が数多く現れ、そのひとりが寺方村（現在の東寺方）に住んでいた、伊野銀蔵〈1848（嘉永元）年～1911（明治44）年〉です。銀蔵の父は算術を含む寺子屋の師匠で、銀蔵も幼い頃から数学に興味を持っていました。しかし銀蔵が18歳の時に父は他界。維新後の1869（明治2）年、稲城の材木屋・高野五右衛門に1年間数学を教わり、さらに関流の数学者・福田理軒※3〈1815（文化12）年～1889（明治22）年〉の神田猿楽町「順天求合社（現・北里大学附属順天中学校・高等学校の前身）」に入塾。約3年間、数学や測量を学びます。帰郷後、銀蔵は農家の青年たちの要望に応えて、私塾を開きました。

ちなみに多摩市では、市立小学校6年生の教科書に、東京書籍の『新編 新しい算数 6 数学へジャンプ！』を採用（令和6年度～令和9年度）。巻末には「和算コース」が掲載され、子どもたちは今も和算に触れることができます。

※1 円、弧、球などに関わる図形の長さ、面積、体積を計算する理論やその方法。※2 複数の数字をまとめて扱い、計算するための数学「線形代数」のひとつ。※3 日本に西洋式の「筆算」を広めた人物。

参考資料：「多摩の算額」「数学の文明開化」／佐藤健一、「絵解き和算ドリル」／西田知己、「刀鍛冶と文明開化～明治期・多摩の乞田鍛冶の渡来に見る海外技術導入～」（2019年。パルテノン多摩）ほか。



「図形・文章題に強くなる！絵解き和算ドリル」
著者：西田知己
発行：小学館
定価：1320円（税込）



「数学の文明開化」時事通信社刊



多摩市史 通史編二 近現代／第一編 近代／第四章 多摩村の誕生／第四節 三 多摩の東京府編入問題／統制された穏健的運動／図 1―4―6 伊野銀蔵（36 歳）『多摩市所蔵資料』

［写真上2点］本記事の参考書籍。［下］36歳頃の伊野銀蔵。昼は農業に従事。夜間に数理を地元の青年・子弟に教えていた。自由民権運動期には自由党に入党し、地域の政治にも貢献。



SEISEKI PEOPLE 6

いつもの風景が変わって見える「街角アート」がもたらす地域愛を育む豊かな視点



岸川久美子さん

アートに興味・関心が強く、東京都美術館のとびらプロジェクトに参加。その後、パルテノン多摩ミュージアム市民学芸員（ミュージアムサポーター）として活動を続けている。

まちのあちこちで見かける石像や彫像。自然とそばにいる、なじみ深い存在だ。そんな「街角アート」が私たちに与えてくれるものとは？市民学芸員の岸川久美子さんに話を聞いてきた。

Interview：Nobuko Matsutake、Utaha Nishihama/ Photo：Yufumi Omori

アートを通して まちへの愛着が増していく

パルテノン多摩ミュージアムの市民学芸員として活動している岸川久美子さんは、もともとアートが好きで、造詣も深い。以前は都内で美術館のアート・コミュニケーション活動に参加しており、自分が住んでいる多摩市でも同様の活動はないか探していたのだそう。2020年に市民学芸員の募集に応募し、第１期修了生として現在まで活動している。岸川さんが制作に携わった「街角アートガイドマップ」（参考：左下画像）をぱらぱらとめくってみると、これがアートだったのか、と改めて気づかされる。街角アート鑑賞ツアーの参加者や、市民学芸員自身もそんな“気付き”を体感していた。「意識して見てなかったものって多いんですよね。参加者の方たちにも毎回『まちの見方が変わった』と感想をいただけるのがうれしいです」。そんな市民学芸員の今までの活動の集大成ともいえるのが、2026年春に行われた特別展「パブリックアートから見た多摩ニュータウン」だ。この時、「楽人のプラッツ（参考：左上画像。聖蹟桜ヶ丘駅東口近くにあるモニュメント。市制20周年の記念に建てられた）」でかつて流れていたという音源を、多摩市役所・作品関係者の協力を得て会場で流すことができた。「もう聞けないと思っていたから、本当にびっくりしました。一見ブロンズ像がメインのように感じますが、後ろの門には著名なモザイク作家さんのモザイク画がほどこされていたり、台の下部には『楽・人・広・場』の文字が刻まれ、市民の憩いの場を願った作者の思いが感じられたり、調べていくのが面白いです」







今まで市民学芸員たちが蓄積してきたものを見てもらえればという思いで特別展に参画したが、根底には自分が見て楽しいと思うものを人にシェアしたいという気持ちがある。「やっぱり美術館にあるアートとは違い、まちとの関係性が見えてきます。街中にあっていつでも誰でも鑑賞することができて、パブリックアートってとてもおおらかな存在なんですよね。たとえば『楽人のプラッツ』なら、春になれば、桜とあわさってすごくきれい。まちの景色と一緒に作品になるようでいいですよね」

普段待ち合わせの目印にしていたモニュメントが、実は有名なアートだった。そんな経験を持つ人も多いのではないだろうか。それほどパブリックアートはまちの人の生活に溶け込んでいる。「鑑賞ツアーでもアートの前で立ち止まり、みんなでいろいろな会話をします。アートのまわりで交流したり、人々が暮らしを営んでいるのが、素敵なことだなと」。また、屋外にあるからこそ経年変化を感じられるものもある。市民学芸員はアートの清掃にも積極的に取り組んでおり、今後も力を入れていきたいのだそう。アートを通してまちへの愛着を灯し続ける、岸川さんの活動を見守りたい。

昔は１日３回、遊佐未森さん作曲による音楽が流れていたという「楽人のプラッツ」。［写真上］彫刻家・中野滋さんによるもの。［中］宮内淳吉さんのモザイク画。［下］女性の像の下部には、制作に関わった作家の名前が刻まれている。

気になるあの人の履歴書 vol.3

このまちの“気になるあの人”に直撃取材するこの企画。
今号は自家焙煎コーヒーストア「tak beans」店主・まつざきゆうすけさんに話を伺った。

Interview、Text：Akira Andoh/ Photo：KAEDEsign

まつざき ゆうすけ
Yusuke Matsuzaki

（tak beans 店主）



Q1
tak beansってどんなお店？

A. 自家焙煎コーヒー豆とテイクアウトメインのドリンク、+いろいろな店です。
産地や農園、品種などがはっきりした高品質なコーヒーを扱っています。焙煎違いを含めて約15〜16種類、取りそろえています。コーヒー豆だけではなく、友人たちが手がけたものや聖蹟桜ヶ丘のお土産になるようなアイテムもそろえています。

Q2
長い休みが取れたら、何をしますか？

A. 旅に出ることが多いです。
観光地はあまり回らず、朝起きたらランニングをして、あとはできるだけ歩いて回ります。今冬ニューヨークへ行った時も、ほとんど歩き。国内外問わず、旅先で歩き回るとSNSなどでは分からない、そのまちの表情に触れられることが多く、いつも新鮮です。

Q3
聖蹟桜ヶ丘ってどんなまち？

A. 当たり障りのないまち。
今は「生活をするまち」なのかな。日々を過ごすのには不自由はないけれど物足りなさを感じています。年を重ねればしっくりくるのかな、今のところしっくりはきてないな。と思いながら15年が経ちました(笑)。

Q4
まちを面白くするには？

A. すでにあるものを伝えること。
自然発生的なものを人工的に作ろうとすると、どうしても無理が生じると思うんです。新しいことや二次利用的なことを持ってきても、盛り上がるかもしれないけれど背景がないからフェードアウトしていく。新しいコンテンツも主催の想いやバックカルチャーがあればいいと思う。このまちに元々あることの魅力が伝わるよう、残すことは残し、魅力を発信していくことも、このまちに求められていることのひとつだと最近よく思います。

Q5
最近興味があることは？

A. 自分の考えを言葉にすること。
Audibleやポッドキャストのような耳から入れられる情報を大事にしています。同じジャンルを3〜5本続けて聞くと、共通のキーワードが見えてくる。ここ数年はそんな風に情報や知識を吸収しています。自分が考えていることをちゃんと言葉にできないと行動だけでは伝えられないと思うので。

「手を伸ばした先にある、楽しいことを形にしたい」

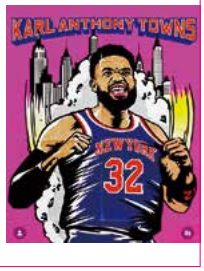
まじめに精一杯遊び続けたい

「専門店って、敷居が低すぎてもダメだと思ってるんです」。中高生の頃、まつざきさんは毎週のように渋谷、原宿に通っていた。雰囲気のあるショップスタッフの圧に負けずに緊張しながらも洋服を見て回った。何度も通ううちに会話するようになり、雑誌の中の世界が少しだけ身近になった。「コンフォートゾーンの外にしか、ワクワクすることはないと思っている」と言い切る。

開業から14年。店は、好きな人たちと一緒に表現をする場。「この小さな空間だからこそ生まれる空気感を大切にしたい」と語る。まちを活気づかせるため？と尋ねてみるが「まちに関わることにはなったけど、別にまちのためってわけでも……」。まつざきさんの好きなまちには、メインストリームがあって、一本入るとそのまちのカルチャーがある。「あれが大好きなんです」。その“一本入ったところ”を、このまちでつくり続けている。

The Life of Hint

自身が影響を受けた人として挙げるのは、アパレル時代の先輩。新卒で入社し配属された原宿店で出会い、のちに上司にもなった。厳しいことも言われたが、遊び方も音楽も映画も、さまざまなことを教わった。ニューヨークを訪れたときも、在住歴のある彼だからこそ知っている場所を教えてくれた。現在はグラフィックデザイナーに。大手ナショナルブランドやプロスポーツチームなどのデザインを手がけ、tak beansのアパレルアイテムのデザインも担当。今も飲みにいく愛すべき先輩だ。



まつざき ゆうすけさん

2012年9月「tak beans」を開業。67回続く「せいせき朝市」ほか、数々のPOP UPやイベントを店舗で開催。まつかわひろのりさんとの共同主催「せいせきさくらがおか MERRY GO ROUND」は2027年4月10、11日に開催決定。

tak beans
@takbeans



今年のカワマチシンポジウムに参加し、聖蹟桜ヶ丘には若いプレーヤーが多いことに衝撃を受けたと話す岡崎さん。プレーヤーの発掘は、双方の大きな課題でもある。また、恵みの象徴でもある水（=川）があるまちへの思いについても語り合ったお２人。イベント利用はもちろん日々の心身のチャージスポットとしても、河川敷を多くの人に活用してもらいたいと三浦さんは話す。

多摩の★ちから ミートアップ から始めよう

2015 年に設立し、多くの取り組みを行っている二子玉川エリアマネジメンツ。2050年を見据えた「二子玉川まちづくりビジョン」も策定され、地域の魅力を発展させる試みにも精力的だ。そこで、2026年6月に代表理事に就任した岡崎雅子さんとまちの人との関わり方をはじめ、まちづくりについて語ってきた。

Photo：Yufumi Omori

二子玉川エリアマネジメンツ
代表理事
岡崎 雅子

×

京王電鉄 沿線価値創造部 部長
三浦 崇

三浦――二子玉川は学生の頃よく遊びに来ていた場所で、当時からおしゃれで住みたいまちという印象です。そういったブランディングがしっかりされていますよね。

岡崎――ありがとうございます。確かに住民が多く、買い物に便利なエリアなので、まちのにぎわいがありますね。私たちはミズベファンベース（二子玉川の水辺を新しい地域の交流拠点にするためのプロジェクト）を運営しているのですが、子育て世代の方を中心に、水辺で親子で遊んだりキッチンカーでランチを買ったりと、川のにぎわいもありますね。

三浦――岡崎さんは町会に所属されていますよね。

岡崎――はい。玉川町会という町会にいます。二子玉川エリアマネジメンツは玉川町会と東急さん、東神開発さんの3つで作り上げています。町会には役員歴の長い方が多いので、そこの連携は要ですね。

三浦――我々エリマネと町会の方たちとが同じ熱量ではない場合もありますから、全体で熱量を上げていくことは大事ですよね。これは共通の課題なのかなと思います。

岡崎――そうですね。まちの盆踊りや例大祭といった昔からあるものは地元の人をつなぐものですし、一体感を生みますよね。ベテランの町会役員も若手もみんなでお祭りの準備をし、みこしを担げば、自分がこのまちの住人だという意識が強くなると思うんです。

三浦――今まで玉川高島屋や二子玉川ライズができたり、大きな開発がありました。そのたびに新しい住民が増えると思いますが。

岡崎――はい、そういう大きな変化が起きた時でも、いろんな立場の人が話し合いできるように作られた組織が「二子玉川100年懇話会」です。玉川町会が中心となり、2か月に１回話す場を設けています。懇話会をやってきて感じたのは、変化が起きても前向きに捉えられる人が多いということですね。

三浦――なるほど。今年は、「二子玉川まちづくりビジョン」も策定されました。

岡崎――これは、2050年に向けて「こういうまちになっていたら」というエリマネが描く将来像を示し、みんなが同じ方向に向けて進むための羅針盤のようなものですね。そのひとつに、都立玉川高校の跡地を地域のハブのような場所にしていきたいという思いがあります。まちの誰もが知っている場所を活用して、人がつながる場所を作れたらいいなと思っています。

三浦――今後も参考にさせていただきたいです。共同でお互いの河川敷を行き来できるイベントができたらいいですね。

岡崎――多摩川流域のまち同士で、防災イベントの共同開催だったり、いろんなアイデアを共有させていただきたいです！

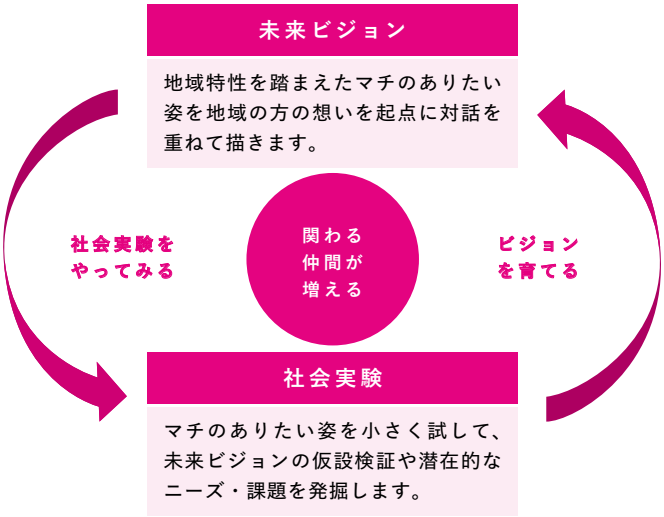
聖蹟桜ヶ丘エリアプラットフォーム準備会が進める、

“未来ビジョンづくり”に密着

2026年4月、まちの有志住民や事業者、行政とともに「聖蹟桜ヶ丘エリアプラットフォーム準備会」がスタート。「まちでこんなことをしたい!」という地域の思いをくみ取り、“未来ビジョン”を地域みんなで考えるための社会実験を進めています。誌面では、現在進行中の社会実験の様子をレポートします。

“未来ビジョンづくり”とは・・・?

聖蹟桜ヶ丘の地域の方たちの想いを、まちの将来像としてまとめ、みんなで実現していくためのプロジェクト。「自分たちが住む場所をこんなまちにしたい」「まちでこういうことを実践してみたい」。そんな地域の方たちの想いを抽出し、社会実験を重ねながら、将来像に近づけていきます。現在、有志3チームが社会実験を実践中。まちの方たちのアイデアが光ります。



有志3チームにより社会実験が進行中

TEAM 1 たまトレカプロジェクト
—セイセキのボードゲームで遊んでみる会—



聖蹟桜ヶ丘の人や場所が登場するトレーディングカードゲームのテストプレイを実施。プレイに使うカードには地域の魅力ある人や場所が載っており、ゲームを楽しみながら知ってもらう試みです。知っている人が登場すると一段と盛り上がりました!

TEAM 2 “まちの窓口”広報部 SEISEKI MEET UP!



「このまちで何かをやってみたい!」「自分の活動を紹介したい!」という想いを持つ人が大集合。その想いを“次の一歩”につなげるきっかけづくりとして、交流イベントを開催。「今日出会った人ともっと話したい」などいい出会いがあったようです。

TEAM 3 せいせき浴泉
—聖蹟桜ヶ丘駅前、足湯コミュニティー社会実験—



地域にある銭湯には、いろんな世代が集まり、自然と会話が生まれるもの。それをヒントに、まちでのふとしたコミュニケーションの場として、足湯を設置する企画もスタート。駅前に突如現れた足湯に、まちゆく人たちも興味津々。この場で出会った人たちが交流を楽しんでいました。

information

◆ **noteで発信中**

“まちの窓口”広報部が運営するnoteにて、“未来ビジョンづくり”や社会実験の様子を発信しています。

詳細はこちら!

京王聖蹟桜ヶ丘
SC便り

スポーツの力で まちを盛り上げる！
東京ヴェルディとの取り組みをピックアップ



今回紹介するのは…
京王聖蹟桜ヶ丘 SC
越湖（こしこ） 健太さん

せいせき
京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター

※京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンターは
東京ヴェルディのホームタウンパートナーです。

2019年の12月末に私たちは、東京ヴェルディとホームタウンパートナーになりました。地域に根付くショッピングセンターとして、地域で活躍するプロスポーツクラブと一緒にまちの活性化に貢献することが目的です。私たちはパートナーとして、館内での試合開催日の告知や、コーチを派遣していただくスポーツ教室の開催を通して、多摩市内でのヴェルディファン獲得に協力するとともに、いろいろなスポーツに興味をもってもらう機会を作っています。

今までの取り組みで特に好評だったのは、2025年4月にアウラホールで行ったサッカーのパブリックビューイングです。みんなで地元のチームを応援することで、地域への愛着も増していくと考えています。また、2026年9月には、味の素スタジアムで応募のあった小学1～2年生をご招待し、サッカー教室を開催。プロ選手とハイタッチもさせていただきました。子どもたちに、地元のプロ選手との交流を通じて、将来の目標にしてもらったり、大きな夢を育んでもらえたらうれしいです。







京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター館内では、今後も東京ヴェルディによるスポーツ教室やイベントなどを開催予定。地域の方たちがさまざまなスポーツに触れられる機会を提供する。

市民クリエイター募集中！

京王電鉄と情報誌『BALL.（ボール）』を発刊するけやき出版は共同で、聖蹟桜ヶ丘のまちの魅力を取材・発信し、地域の価値創造を目指す取り組みの1つとして、市民参加型ローカルマガジンの発行を行っています。本誌は、聖蹟桜ヶ丘“People”ガイドをテーマに、毎号1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャー。本誌では、有志の市民クリエイターとして聖蹟桜ヶ丘の“まちの魅力”を深掘りする方々を広く募集しています。

〔 問い合わせ先 〕

けやき出版
TEL：042-525-9909（平日 9 時～ 18 時）
MAIL：e-info@keyaki-s.co.jp

まちの掲示板

本格的な冬が到来する12月。せいせきカワマチを彩るクリスマスマーケットを開催します。ワークショップ、音楽ライブのほか、キッチンカーによるフード&ドリンクも充実！ 多摩市ならではの竹のクリスマスツリーも展示するので、ぜひ足を運んでみて♪

日時：12月13日（日）10時～16時 ※雨天中止
場所：せいせきカワマチ
主催：多摩河原フェス実行委員会



編集後記

今号もたくさんの方にご協力いただき、#11が完成しました。ありがとうございました。寒さが厳しくなる今の時期、ぬくもりを感じさせてくれる『灯す人』にお会いしてきました。お話してみて伝わってきたのは、まちへの愛着や前向きな眼差し、そして深い情熱。穏やかに灯るみなさんの思いを、ぜひ受け取ってみてください。

過去号をすべてアーカイブしたWEB版もぜひ!!

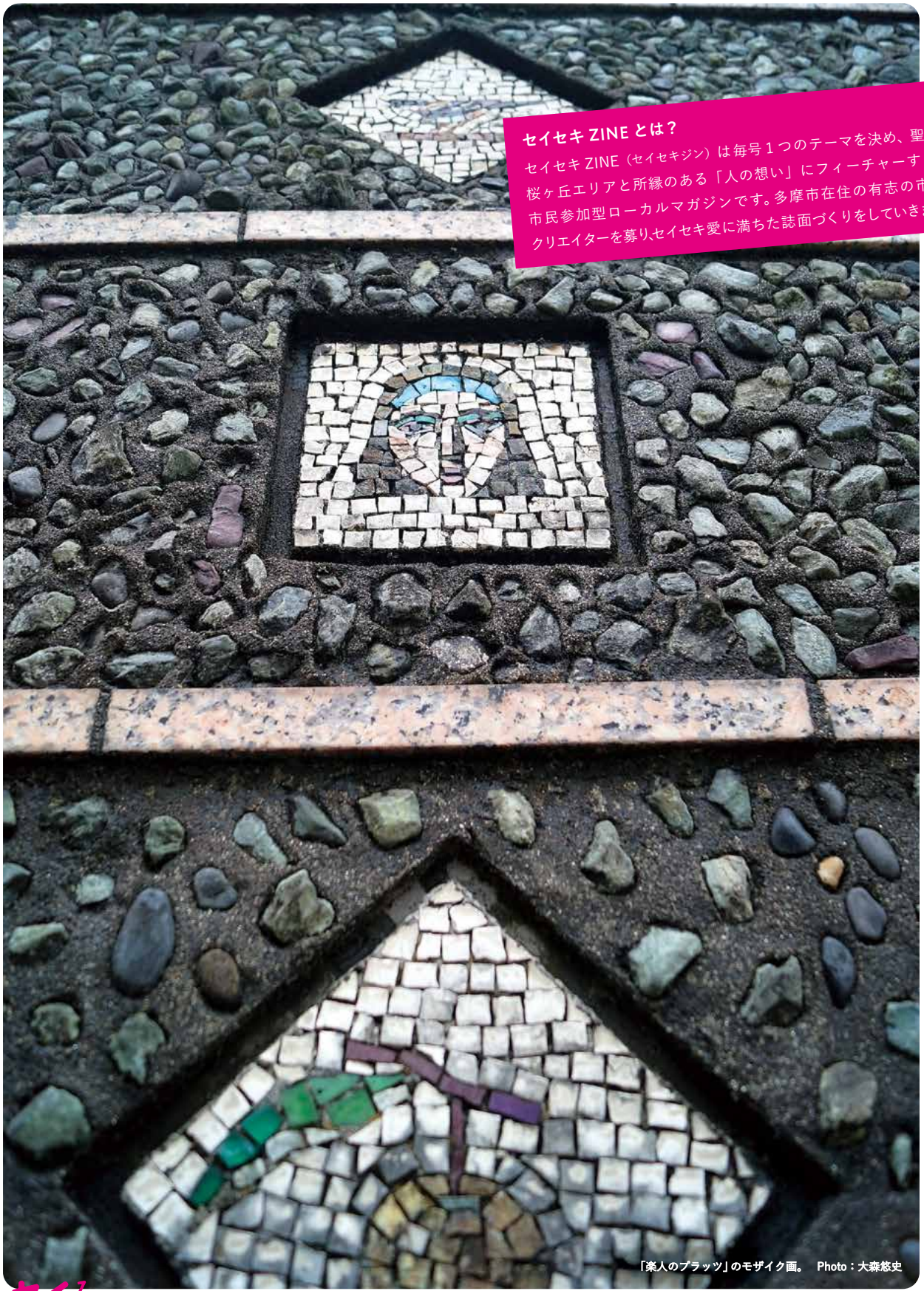
市民クリエイターのみなさん

安藤 賛さん、岩﨑瑞穂さん、大星円香さん、大森悠史さん、恩田 環さん、黒澤教子さん、相馬良江さん、平 幸夫さん、田中桃花さん、西浜詩葉さん、長谷川早弥香さん、松竹暢子さん、三宅祐子さん、吉岡さとみさん、KAEDEsignさん

本誌に掲載する情報は 2026 年10月末時点のものです。

セイセキ ZINE とは？

セイセキ ZINE（セイセキジン）は毎号１つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャーする、市民参加型ローカルマガジンです。多摩市在住の有志の市民クリエイターを募り、セイセキ愛に満ちた誌面づくりをしていきます。



「楽人のプラッツ」のモザイク画。　Photo：大森悠史

セイセキ ZINE

発行日：2026年11月27日　発行：株式会社けやき出版　企画：京王電鉄株式会社　制作：けやき出版 BALL.COMPANY 事業部
デザイン：松竹暢子（Elstella Design Studio）、三宅祐子　編集：弓削桃代　印刷：シナノ書籍印刷株式会社